



2020. 9.10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- withコロナ時代の国際協力～2020年度のスタートに向けて～..... 1
- 新型コロナウイルス流行下のラオスの状況..... 2
- コロナ禍に圧迫されるカンボジアの社会と人々..... 3
- コロナに揺れるネパール..... 4,5
- 「多文化共生の地域づくり」に向けた準備会/
「南北코리아と日本のともだち展」/ラリーさんを偲んで..... 6
- 地球の木と私/新理事紹介/活動日誌..... 7
- インフォメーション(地球の木カレンダー/イベント情報)..... 8
- 編集後記..... 8

withコロナ時代の国際協力 ～2020年度のスタートに向けて～

いその よしこ
理事長 磯野 昌子

2020年度は誰もが想像もしていなかった恐るべき社会の幕開けとなりました。昨年末に中国で始まった新型コロナウイルス(COVID-19)は瞬く間に全世界へと拡がり、2020年7月末現在、世界の感染者数は1,600万人(4月末は250万人)を超え、死者は65万人(4月末は20万人)に近づいています。緊急事態の混乱期は経たものの、私たちは、第2波、3波を警戒しつつ、今後数年間にわたって続くであろうコロナウイルスに対応した時代を築いていくことが求められています。



コロナ禍は世界中の人々の暮らしに甚大な影響を与え、国内外を問わず特に生活基盤の脆弱な人々を窮地に追い込みました。地球の木の海外支援地であるネパール、ラオス、カンボジアでは3月より3か月もの間、都市封鎖(ロックダウン)が行われ、経済的影響により大勢の人々が職を失い日々の食糧にも事欠くようになりました。カンボジアでは、地球の木は家庭内暴力などの被害者である女性や子どもたちの支援を行ってききましたが、外出規制がされる中でさらなるDVや児童虐待の被害者が行き場を失いました。ロックダウン期間には学校が休校になり、世界中で教育のオンライン化が進みましたが、そのことはさらなる教育格差を生じさせました。

日本国内でも同様の問題が起きています。飲食店や観光業が閉鎖に追い込まれ、未成年の少女たちが路上を彷徨い、望まない妊娠に苦しんでいます。小中高校は6月よ

り徐々に再開したものの、学校行事は中止となり通常の学校生活には戻れないでいます。大学生は入構が許されずにオンライン上で多くの課題に追われ、精神的不安から解放されることがありません。

こうした中、「海外も大変だが私たちもコロナの被災者であり、まずは国内の問題解決が優先されるべき」と考える人はますます増えることでしょうか。しかし、本当にそうなのでしょうか。それでは某国大統領と同様の自国主義に陥りかねません。世界中で起きている問題に共通の解決策が必要なのであれば、今こそ国際協力が求められる時だとは言えないでしょうか。新型コロナウイルスは、近年頻発する感染症(エボラ出血熱、SARS、鳥インフルエンザ、MERSなど)と同様に、自然破壊と気候変動によって生じたであろうことが指摘されています。気候変動は世界各地で森林火災、豪雨と干ばつ、バツの大発生などの気候危機を引き起こしています。

コロナにとどまらない様々な危機を乗り越えるために、私たちは知恵を集め情報を共有し、解決のために連帯する必要があります。このような時こそSDGs(持続可能な開発目標)のスローガンである「誰一人取り残さない」社会をつくっていくことを肝に銘じないといけません。そして、この危機を、「真に持続可能な世界に向かうための、社会変革の契機」としていくことが私たちの責任であり、世界の草の根の市民と支え合いながら、この困難を共に乗り越えていきたいと思えます。

新型コロナウイルス流行下のラオスの状況 ～JVCラオス現地スタッフからの返信～



JVCラオス事務所 フンパン・センチャントン
(プロジェクトコーディネーター)

ラオスに駐在するJVC(日本国際ボランティアセンター)現地代表の岩田健一郎さん、駐在員の山室良平さんは、それぞれ3月、4月に一時帰国し、そのまま戻れずにいます。そんなコロナ禍の中、現地事務所を守るラオス人スタッフたち。リーダーのフンパンさんに、ラオスの現況についていくつかの質問に答えていただきました。

Q1 コロナウイルスが世界に蔓延している現在とそれ以前で、事務所のあるサワンナケートの街の様子、人々の暮らしは具体的にどう変わりましたか。

これまでは仕事や買い物、通院などの目的で隣国タイやベトナムに行き来していましたが、政府が制限してからそれが思うようにできなくなりました。またお米や肉などの食料品や、その他輸入に頼る生活必需品の価格が高騰し、水道光熱費も高くなるなどして生活費がかさむようになりました。一方、人々の移動や旅行の機会が減ったこともあり、ゲストハウスの宿泊費やガソリン代は安くなっています。

政府はしばらくの間、学校や運動競技場を閉鎖し、飲食店の営業を禁止しました。私の妻が経営しているレストランも長い間営業できず苦労しました。経済悪化で、会社や工場、ホテルやレストランの仕事も減少。人々は新型コロナウイルスの第2波がやって来るのを懸念しており、更に物価が上昇したり収入が減ったりするのを見越して、できる限り生活費を節約しながら過ごしています。

Q2 支援地の村にもラジオやテレビで、他国の状況も含めコロナ関連のニュースは届いていると思いますが、村人たちはどんな風に気をつけているのでしょうか。

村では、訪れる外国人や海外の出稼ぎから戻って来た若者に注意を払っています。村長は、出稼ぎから戻ってきた人たちを小学校など所定の場所に14日間隔離して経過観察をしなければなりません。また、郡の行政が設置したキャンペーンチームが1～2週間おきに村にやって来て、3月末に発表された「感染防止策の強化に関わる首相令」の内容などを村長に伝達、村長がそれ

を村人に周知してきました。村人が他の村に行く時も村長に申請してサインをもらうことになっています。私たちJVCスタッフも村人と会う際には感染の危険性を説明して、マスクの着用や手洗いを勧めるようにしています。

Q3 タイからの帰国者が村に戻ってくる状況でも、ラオスでは感染がうまく抑えられたようですが……。

7月24日現在、ラオス国内で確認された感染者は20名となっています。村人たちはテレビやSNSなどを通じての公の情報に従って生活、街に暮らす私たちはマスク、手洗い、公共の場では人と一定の距離をとるなど、一般的な感染予防策をおこなっています。サワンナケートのタイとラオスの陸路国境では、入国者を対象に検査と14日間の隔離がされていますが、中には小型の船でメコン川を渡って違法に帰国する者がいて、罰金を課して隔離措置をとるなど厳しい取締りもおこなわれています。

Q4 日本の駐在員がいないラオス事務所ですが、仕事はどんな風に続けているのですか。

一時帰国している駐在員と頻りに連絡をとりあって業務を続けています。週のはじめにラオス人スタッフ全員で情報の共有と活動計画を相談するミーティングをおこないます。日本にいる駐在員には前の週の活動経過を報告し、その週の活動内容を共に検討、計画と予算に対する同意を得てからフィールド出張に出かけます。毎週、主に2～3日間、長い時にはその週一杯をかけて、村での活動に取り組みます。出張から戻り次第、それをレポートにまとめ、次の週を迎える、この流れを繰り返しながら鋭意活動を進めています。



新型コロナウイルスの感染防止対策を周知する看板

コロナ禍に圧迫されるカンボジアの社会と人々



写真提供 JVC

村を巡回する保健省のバイク
手洗い方法を教え、感染状況をアナウンス

各国の新型コロナウイルスの感染拡大が終息しません。いったん収束したかに見えた日本やヨーロッパそして南米やアフリカ、南アジア等にも広がっています。

その中で、カンボジアは政府公式発表によると、7月17日現在、感染者171人、死者はゼロと感染者はとても少ないです。現地のNGOスタッフに聞くと、感染者が少ない理由として、高床式の住環境が感染しにくいこと、平均年齢が若く感染しても重症化しないこと、地方では亡くなってもコロナの診断がされていないこと、医療体制が脆弱なので、感染の拡大を防ぐため早めの対応を取って、出稼ぎ労働者の帰国を規制し国民に移動を禁止したこと、等を挙げています。

感染対策としては、複数での集会禁止、手洗いの実施(保健省がバイクで巡回チェック)、環境の美化、帰国者の2週間隔離等で、基本的な防止対策は住民に周知・実践されています。学校

に関しては、年末までは休校となり、リモート授業のできない農村部では、先生が家庭を回って少人数ずつ授業をしているとのことです。

現在、新たに感染が確認されるのは空港での帰国者のみ。市中感染は広がっていないとのことですが、主に観光と欧米に輸出する縫製業等によって成り立っている産業界は大きな打撃を受けており、今一番の問題は失業率とのこと。タイやベトナムへ出稼ぎに行っていた人が戻ってきたが仕事がない。観光業も壊滅的で、アンコールワットへの外国人観光客は99%減っています。

その失業率が原因で子どもたちの学校中退率が上がり、家庭内暴力や虐待も増えてきているとのこと。今後、何百万人ものカンボジア人が貧困に陥る可能性があると思われます。

支援先のCWCC(カンボジア女性緊急支援センター)では幸いなことにシェルター内の感染者は出ていませんが、カンボジアでもコロナ禍によって日常が変わったり、様々なストレスが家庭内に持ち込まれることから、DV被害が増えているとのこと。シェルターを出たサバイバーやその家族へのフォローは今までは訪問で行っていましたが、感染防止のため電話対応に切り替えているそうです。サバイバーたちもコロナの影響で経済的に厳しい状況とのことです。

シェルターにいる被害者の女性と少女については、CWCCがコロナのガイドラインに従って活動しており、安全対策を行っているので特に問題は生じていません。しかし、シェルター滞在の彼女たちが家族を訪問するためには家族と会う前後14日間、隔離生活を送らなければなりません。従って、このような状況の中、被害者の女性と少女は家族を訪問するために外出することはせずに、シェルター内で生活をしているとのことです。

今後、DVなどの被害者が増えてCWCCが忙しくならないことを祈るばかりです。(カンボジアチーム 成瀬 悦子)

不安とストレスを抱えながらの商品づくり

「COVID-19は最悪だ！観光客が全くいないから、お店は閉めている。プノンペンがロックダウンする前にスタッフはみんな、実家に帰ったよ。うちのスタッフはみんな元気だけど、地雷やポリオによる障がい者が多いので、感染すると重症化するリスクが高い」とカンボジアのNGOショップ「タブロム」のサムさんからメールが届きました。

別のNGOショップ「ピース」からも苦しい状況が伝わるメールが届きました。「観光客がいないのでお店は閉めている。でも、スタッフ(多くは地雷やポリオによる障がい者)の雇用を守るため商品づくりは続けている。不安とストレスを抱えながら、みんな働いている」とのこと。

社会が不安定な状況になると、真っ先に影響を受けるのは貧困層の人々や障がい者、子どもたちだと思います。観光客がカンボジアを訪れる日はまだまだ先かもしれませんが、彼ら・

彼女たちの雇用や生活を何とか守っていければと思います。
(クラフト担当 竹内 千佳)



「ピース」のアトリエでもマスクづくり

コロナに揺れるネパール ～培った地域力に期待～

新型コロナウイルスは、世界中を人や物が移動する現在において瞬く間に拡がり、どの国の人々も先行きの見えない不安を抱いて暮らしています。その影響はネパールにも深刻な影を落としています。

オンラインでつながる

3月初めに予定していたネパール現地調査を中止しました。その後、現地パートナーSAGUNとはオンラインによる話し合いを行ってきました。5月のミーティングでは、感染者が多くなっているインドから、失業した何万人もの労働者がどっとネパールに帰ってきていることを知りました。さらには帰国を待っているネパール人が中東に60万人。他の国にも大勢待機していると聞き、ことの重大さを実感しました。「貧困」「精神面のケア」「教育」を重要課題とすることをSAGUNと確認し合いました。

6月のミーティングでは、インド国境沿いの地域で感染者が増え、いよいよ支援地のロシ農村自治体(マンガルタル村を含む新しい行政区分)にも3人の感染者が出たとのことでした。しかし、感染者は若年層が多いためか、ネパール全体でも死者は少数にとどまっています。その反面、自殺者は1,200人にものぼっています。移動制限のため、スタッフは村には入れず、十分な話し合いができないため、具体的な計画を立てることが難しい状況です。

ネパールの状況

3月19日から学校の一斉休校、22日からは全国でロックダウンが発令され、早い段階から感染拡大を防ぐ措置が取られていたため、5月末までは感染者と死者の数は抑えられていました。一方、封鎖により経済活動が停滞し、仕事がなくなった都市の労働者たちは、こぞって故郷へ帰って行きました。カトマンズから歩いて帰る人も多く、ロシ農村自治体ではその人たちに食料を提供するボランティア活動も活発に行ったということです。

感染者が徐々に増えつつある中、6月11日に一部の規制が解除され、7月22日に突如ロックダウン終了宣言が出されました。7月30日からはホテルやレストラン、トレッキングを再開しました。

日本も観光客の激減で大きな痛手を受けていますが、ヒマラヤ登山やトレッキングなど、観光はネパールの主要な収入源です。今年は「ビジット・ネパール・イヤー(Visit Nepal Year)」として観光に力を入れ、200万人の旅行者を迎える計画でしたが中止されました。しかし、秋の登山シーズンを見据えてか、8月17

日からは国内線も国際線も運行再開の予定です。日本のGo Toキャンペーンと似たようなチグハグさを感じます。これに対し、一般市民は感染拡大の恐怖に怯えているとのこと。

8月13日現在、全国で24,432人の感染者、91人の死者(ネパール政府発表)が確認されていて、刻々と増えつつあります。中東やマレーシアなどに住む多くの人たちが帰国を待っているため、今後の感染者増大と、それに対応できる医療体制の不備が心配されます。

出稼ぎ事情

ネパールは国内に雇用の機会が少なく、500万人以上の人たちが外国で働いています。特に2015年の大地震の後、多くの若者が外国に出ています。私たちが、最近、ネパールから帰国する際に空港で目にした、中東などに出発する若い男性たちの行列が思い出されます。このような人

たちからの海外送金はネパールのGDPのなんと27.3%(2019年)を占めています。送金により、ネパールの家族は借金を返し、まともな生活をするできるようになりましたが、村の過疎化や家族の崩壊など、様々な問題も出現しています。それでも海外送金のおかげで「最貧国」から抜け出そうとしている時でした。外国に住むネパール人にコロナの感染者が多く、130人(7月初旬の数字)が死亡していることも注目すべき点です。

学校

3月から休校が続いています。予定されていた中等教育修了試験(SEE: 10年生の終わりに受ける統一試験)は中止され、普段の成績をもとに学校単位で成績をつけることになりました。一番困るのは12年生。高校課程修了試験は、大学進学をめざす生徒にとって、将来の

コースを決めるための重要な試験なのです。

オンライン授業が難しい村の公立学校では、政府が流すラジオ放送で授業が受けられます。FMラジオの普及は進んでおり、ラジオがない家庭でもスマートフォンで聞くことができます。スマートフォンの普及率は92%。しかし、どれだけの生徒がラジオ講座を聞いてるかはわかりません。



コロナの啓発ポスター

ロシ農村自治体

ロシ地域は主に農業を収入源にしていますが、村で作った野菜は近隣の地域でのみ販売しています。若者が流出していた村に失業して戻ってきた人が増え、食料の需要も増えています。放置してあった土地を耕す人が戻ってきたことは嬉しいことですが、すぐに作物が採れるわけではありません。嬉しいニュースは、農民会議のあと設置したビニールハウスのトマトがよくできていることです。他地域の成功例を励みに、長い間収穫できるハウス栽培に希望が見えます。村の人たちのもうひとつの収入源である水牛のミルクは、ルートがあり、売ることができていました。しかし7月の大雨で道が崩れ、トラックが入れなくなったため、担いで徒歩で幹線道路の集積所まで運んでいるとのこと。



ビニールハウスのトマト栽培(ラジャバス)

学校の再開は未定ですが、学校ごとに再開の準備は進めているようです。ただ、奨学生たちが通うシユリ・マンガル・ジャナ・ビジャヤ高校は現在隔離センターとして利用されているので、使用できません。現在14人がこの学校で隔離されています。

最近ロシ周辺で自殺者が4人出ました。1人が60歳、3人は若者。コロナ関連とのことですが、先行きが見えない今の状況で



隔離センターとなった高校

は生きていくことが苦しくなるのでしょうか。SAGUNと共に、未然に防ぐ対策を考えていきます。

これから

ロックダウンのため、SAGUNのスタッフは村の人たちとの話し合いも視察もできませんでした。小学生や教師トレーニングなど、学校を拠点としたプログラムは実施できなく、今年度の計画を予定通り進めるのが難しくなりました。訪問が許可され次第、現状把握と話し合いが進められるよう調整しています。SAGUNとの話し合いで、今年度の事業は次の重要課題に沿って進めていくことになりました。1)生活困窮者への緊急の食料などの支援、2)収入創出のためのローン、3)奨学生の人数拡大、4)教材や情報の提供、5)村人のカウンセリングなど。

コロナの影響が村にも大きな変化をもたらすことを懸念しつつも、人々の地域力、団結力によって乗り越えていくことを期待したいと思います。(ネパールチーム 丸谷 士都子)

13年間を振り返ると

ネパールの現在のプログラムは14年目に入ります。最初の年に、村の高校生や若者など30名ほどで4日間の参加型状況調査(PRA)のトレーニングを行いました。実際に、ある集落で村人たちと一緒に村落資源マップや季節カレンダーなど様々なPRAのツールを使って調査をしました。私も共に参加した時のワクワク感は今でも鮮やかに蘇ります。当時の参加者や卒業した奨学生たちが今も村の活動に協力してくれています。

「参加」がキーワードで何度も村人との話し合いを持ち、評価も参加型で行いました。地球の木の定款に謳われている「地域と地域を結び国際協力活動、相互理解を深める社会教育」を現地パートナーと一緒に実行できたことが何よりも成果だと思います。

(ネパールチーム 丸谷 士都子)



村の未来は自分たちで決める!

「多文化共生の地域づくり」に向けた準備会

今年度の事業計画の一つである「多文化共生の地域づくり」。それに向けた準備会を立ち上げました。今後このテーマに沿って身近なところで具体的な活動を行っていくことを検討します。

2018年の「入管法」改正。これは人口減少による労働力不足解消のために外国籍の人たちを受け入れるということです。大勢の外国人が暮らし、働く日本はすでに「移民社会」と呼ぶような状態にあります。これに対して地球の木として何をすべきかを真剣に考え、実行していきたいと思っています。日本に住んでいる私たちは、今までの意識のままでこれからの移民社会を受け入れていくことはできないのではないかと思うからです。日本に来る彼らは私たちと同じ地域に住む生活者でもあるという認識を持つことが重要なポイントで、その人たちとこれからの社会を創っていくことをイメージします。

今、世界では自分の生まれた国で死ぬまで生きるのが普

通ではなくなっている、多くの人たちが国境を越え移動しているのが普通になっていると言われています。国境を越えた問題が次々と起こる時代には色々な考えの人たちがいる社会のほうが強いとも言われます。多文化共生とはどのようなことなのか、地球の木が30年続けてきた国際協力の経験を生活者・市民の立場で役立てることができようか。

準備会では、これまでの多文化に関する日本における歴史、現状の政策・制度の問題点、欧米での取り組み等を知ることから始めます。また、日本で暮らす人たちの現状(困難だけではなく色々な事)を知ることを行います。多文化共生を外国籍の人たちと共に考え解決していくことは、今私たちの抱えている国内問題を再認識することにもつながり、解決に向かうことにもなると考えます。

「もう私は始めているよ」ということがあったら是非教えてください。(副理事長 大嶋 朝香)

オンラインで開催

「南北 코리아 と日本のともだち展」

2月から延期されていた第19回東京展でしたが、7月1日～8月31日に「第19回ともだち展@オンライン」として開催されました。

「わたしがあくりたい金メダル」をテーマに、大切なもの、感謝の気持ちを伝えたい家族や友だちやペットなどの130点の絵が、メッセージと共にオンラインで展示されました。南北 코리아、中華人民共和国、日本に住む子どもたちが描いた絵の沢山の共通点やちょっと違うところなどを見つけたり、子どもたちの姿を想像しながらゆっくりと観賞しました。(会報作成チーム 沼田 由美子)



画像提供: 南北 코리아 と日本のともだち展実行委員会

ラリーさんを偲んで

フィリピン・ネグロス島のラリー・ギリエマさんが7月16日に亡くなったことを知りました。52歳、ちょっと早すぎる。ラリーさんという思い出されるのは、青少年スタディツアーのことです。地球の木は、日本ネグロス・キャンペーン委員会(現NPO法人APLA)に協力し、ネグロス島への支援を行い、青少年を募集して現地へのスタディツアーも行っていました。そのツアーでは、ネグロスの青少年と共に、自分たちの思いを身体で表現していくようなワークショップを行い、感動的なものでした。ラリーさんは、そこでファシリテーター(進行役)を務め、はたまた社会派アーティスト(音楽や絵も画く)でもあったのです。地球の木では2005年に、それまでのツアー参加者の若者とも協力し、日本でラリーさんのワークショップを開催したこともありました。「ラリーさん、ちよいとはにかんだ表情、それにほのほのとしたアバウトさが魅力的でしたよ」。残念です。(静岡県伊東市 米林 大作)





障 がいのある人もない人も共にすごせるたまり場作りをめざして早32年、「ぐるーぷ・ちえのわ」と共に歩んできた。そこに「さをり織り」の工房を作りたいと考えていた2000年、ネパール・スタディツアーに参加して、ニルマラさんの地域活動を見た。アイデア溢れるパワフルな指導力。活動の進め方を学び、新たな事業に取り組む覚悟ができた！

2010年、「ちえのわ」仲間のM氏を誘い、2度目のスタディツアーに。モノやカネはないけれど自然の恵みを大切に心豊かに暮らす人々。背負いかごに溢れる干草を物ともせず、黙々と作業する少年。赤ん坊をヒョイと抱えて子守する少女。こんな人々の姿を目にしたM氏は、一瞬にしてタイムトンネルをぬけてピュアな心の少年に戻ることができた！

無口であまり動かなかった彼が、帰国後、震災ボランティアに、養護学校の生徒の送迎にと行動の人に变身！マンガルタル村の人々と自然が本当の自分呼び戻し、ありのままである自由を取り戻させてくれたのだ。

2016年、「ちえのわ」で行われたSAGUNのカマルさんのワークショップは、私自身にとって有意義なものであった。肯定的なヴィジョンを導き出す彼の手法は、メンバー各々の心の奥底に潜んでいた思いを引き出してくれた。わずか1ヵ月後には、染めと陶芸の体験ができる「アトリエ十色(といろ)」が誕生した！

2020年「ちえのわ」は変革の時を迎えている。認知症や要支援の人々が集うサロンの受託。車いすユーザーが集えるようにバリアフリー工事を。利用者さんのニーズとサポートできることをじっくり話し合いながら、課題を一つひとつ解決していきたい。

地球の木に学び、たくさんのギフトに感謝しつつ。
(横浜市戸塚区 塩入 眞知子)

× . . . × . . . × . . . × . . . × . . . × . . . × . . . × . . . ×

私 が最初に地球の木を知ったのは、大仏で有名な高徳院で行われた「かまぐら国際交流フェスティバル」にアムネスティ・インターナショナル(人権NGO)のメンバーとして参加した時でした。毎年参加しているうちにすぐに地球の木の方たちと親しくなりました。

いつも私が感心するのは、地球の木が草の根レベルで質、量ともに支援地の女性や子供たちの教育支援をし、トレードについて学ぶ手助けをする、その結果、彼女たちの自立につながり大きな変化をもたらしているということです。また、これら支援地の状況や人々の暮らしを国内で伝えることにより、時間を使いボランティア活動をしている会員、金品を寄付して貢献している人たちの暮らしをも豊かにしていると考えます。毎年購入している地球の木カレンダーを見ては活動の様子を思い浮かべています。

カナダから来日して47年以上経ちますが、徐々にしかし確実に、立派なNGOが増えてきているのを実感しています。中でも地球の木はトップの一つです。これからも頑張ってください。

(鎌倉市 ウイルソン ヘザー)

新理事が決まる

理事1名の辞任により理事数が定款の定数に満たなくなったため、また、組織の充実を図るため、7月18日に臨時総会を開催し、3名の新理事が承認されました。

乳井京子(ネパールチーム長)、山崎信子(出前講座チーム長)、沼田由美子(会報作成チーム長)。任期は1年間です。どうぞよろしくお願ひいたします。

活動日誌(3月～8月抜粋)

3月

- 12日 デポー展示会(東戸塚)
- 23・24日 デポー展示会(霧が丘)
- 26日 第10回定例理事会

4月

- 2日 はまかぜ新聞来所(取材)
- 18日 第11回定例理事会*
- 22日 期末監査(業務監査は書面で実施)

5月

- 23日 第21回通常総会
- ” 第1回定例理事会*

6月

- 20日 第2回定例理事会
- ” デポー展示会(東戸塚)
- ” 多文化共生準備会

7月

- 15日 寄付品仕分けボランティアデー
- 18日 臨時総会
- ” 第3回定例理事会*
- 21日 認定NPO実態確認
- 27日 ロシ・ラハールを読む会*
- 29日 寄付品仕分けボランティアデー

8月

- 8日 第4回定例理事会*
- 27・28日 デポー展示会(ひらつか)

- ・7月1日～8月13日 第19回南北コリアと日本のともだち展(オンライン)
- ・4月8日～5月31日 新型コロナの緊急事態宣言に伴い事務所業務停止

*はオンラインもしくはオンラインを併用して開催

2021「地球の木」カレンダーができました

テーマは“つながり” 「私は、おもう。～ Here, There, Everywhere～」

新型コロナウイルスにより、私達は多くの分断を経験しました。人と人との分断、都市と地方との分断、国と国との分断。分断が生み出す不安や恐れは、排斥や排除、暴力へ繋がっていくことも、私達は経験してきました。分断を乗り越えてつながりへ。写真の撮影地はパレスチナ、カンボジア、スーダン、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)。ジャーナリストの堀潤さんのあたたかいまなざしで撮られました。



■写真:堀潤氏

■サイズ:

[壁掛け] 32cm×38.5cm

(使用時60cm×38.5cm)

[卓上] 15.5cm×17.8cm×7.5cm

■制作元:日本国際ボランティアセンター(JVC)

■価格:[壁掛け] 1,600円(税込)

[卓上] 1,300円(税込)

※カレンダーの収益は、地球の木の国際協力活動に使われます。

地球の木講座2020 今、この人に聞きたい!

SDGs時代とコロナ禍の国際協力とは?

日時 **10月10日(土) 10:00~11:40**

会場 **オンラインZoom**

講師 **大橋正明さん**

(聖心女子大学現代教養学部人間関係学科教授、グローバル共生研究所所長)

参加費 **無料** ※通信費はご負担ください

申込方法 **ご参加希望者は、地球の木事務局**

(chikyunoki@e-tree.jp)まで、氏名・メールアドレスを明記の上、Eメールにてお申込みください。URLをお送りいたします。



4月に開催予定だった地球の木講座をオンラインで開講します。地球の木にとっては初のオンライン講座となります。講師は、長年、日本の国際協力NGOを牽引してきた大橋正明さん。コロナ危機によって開発途上国がどのような現状にあるのか、今必要とされる国際協力とは? SDGsの行方についてなど、お話をうかがいます。

デポー展示会

9月26日(土) 東寺尾

9月28日(月) 緑園

29日(火) //

10月12日(月) 大丸

11月20日(金) 南林間

12月3日(木) つなしま

事務局人事

本年4月から、大嶋朝香副理事長が事務局長を兼任することになりました。これで事務局は、大嶋、山内、竹内の3人体制となりました。どうぞよろしくお願いいたします。



◆フェイスシールドをつけてのコーラスが再開された。すべてを忘れて実に楽しい小一時間。でも家に帰ったら即、元のモヤモヤと心配する高齢者に戻ってしまった。悩ましいですね。(K.S)

◆外出を控える中で、図書館で本を借りて読んだ。学生時代利用した図書室の本のうしろには借りた生徒名がずらりと並んでいた。この友もあの先輩も読んだのかと思いつつページを繰った。個人情報などと言わなかった遠い昔。(M.H)



特定非営利活動法人
地球の木